

「馬鹿者」であり続ける

サポーター

一般社団法人 Water-n 代表理事 奥田 早希子



こんにちは。サポーター第1号の奥田と申します。肩書は上記の通りですが、その他にもいくつかあります。

- 編集オフィス chomo 代表（個人事業。フリーライター・エディター）
- 環境新聞契約記者
- 東洋大学 PPP 研究センターリサーチパートナー
- 下水道広報プラットフォーム企画運営委員

活動のベースには一貫して「水」があります。公害のひどい時期にひどい地域（阪神工業地帯に位置する尼崎市）で、汚くて臭いドブを見ながら育ったからです。「汚れた水をきれいにするのは難しい。なるべく汚さんように使って、きれいにしてから地球に還すほうが賢いやん」と小学生ながらに思っていました。

下水道は、水を還すための代表的なインフラです。整備が進んだおかげで、かつてのドブは今ではちゃんとした「川」になっています。この状況を、あわよくばもっと良くして次世代に還していかなければなりません。しかし、下水道の持続性には今、黄信号が点灯しかかっています。老朽化、更新投資の不足の恐れなど、新しく難しい課題が突き付けられているのです。

その解決策を考える時、気を付けていることがあります。それは下水道にこだわりすぎないこと。「下水道が下水道のために下水道を良くすることを考える」では、視野が狭くなってベストアンサーに行き着かないと考えるからです。近視眼的にならず、視点を高く、思考のウィングを拡げてゴールを意識するようにしています。「水環境を良くするため」というゴールは、ある程度まで水環境が改善された今となってはもはや時代遅れです。では、老朽化対策でしょうか？経営改善？どちらも違うと思います。それらは下水道の改善だけを考えているからです。私は社会福祉や地域活性化などと関連付けて考えるようにしています。「持続可能なまちづくりのために下水道に何ができるのか」。この視点こそが下水道のあり方をドラスティックに変革し、思いもよらない解決策に導いてくれると考えています。

そのことに気づかされたのは、東洋大学社会人大学院でした。「朽ちるインフラ」の著書で有名な根本祐二教授はじめ、リノベーションまちづくりで活躍されている清水義次先生などの下で、幅広く公民連携について学び、現場で実践されている多くの方々の生の声に触れました。「まちづくりは若者・馬鹿者・よそ者が変える」とよく言われますが、私はそれを清水先生に教わりました。どのような組織や業界にも当てはまる考え方です。若者でい続けることはできませんが、馬鹿者であり続け、水にこだわりながらもよそ者の視点を持ち続けたい。いろんな人が集まる CNCP は私にとって、そのための刺激を与えられ、思考のウィングを拡げる場でもあるのです。